

<書評>

「QOL」を知りたい・使いたい人たちへ待望の一冊

「臨床・研究で活用できる！ QOL 評価マニュアル」

下妻 晃二郎●監修

能登 真一●編

評者 齋藤 信也(岡山大大学院教授・保健学)

医療関係者で QOL という言葉を知らない人は皆無ではないかと思う。私は外科医であるが、外科ではこれまで根治性を重視し、QOL を軽視しがちであった歴史がある。そこに乳房温存や、機能温存手術が導入される中で、それがもたらす QOL の改善を測ってみたいという素朴な気持ちが生じてくる。ところがいざ QOL の測定となると、使用可能な日本語版尺度がなかったり、あったとしても、不自然な日本語で、それをわかりやすく変更しようとする「そんなことをしてはいけない!」と言われたり、さらには「勝手に使うと著作権者から訴えられるよ」などと脅かされると、少し気がなえてくる。加えて、信頼性とか妥当性とか、測定特性とか計量心理学の用語が頻出すると「うーん」となってしまうがちである。

そこに現れた待望の一冊が本書『臨床・研究で活用できる！ QOL 評価マニュアル』である。編者の能登真一先生は、理論と実践の両面にわたり、斯界をけん引してきたリーダーでもあるが、同書を「臨床・研究で『活用』できる『マニュアル』」と明確に性格付けている。背景となる理論は過不足なくコンパクトにまとめられている上に、「尺度別」に具体的な記載がなされている点がユニークである。「マニ

アル」としてその尺度の特徴・開発経緯・日本語版の開発・著作権の使用に当たっての注意点・質問票そのもの・スコアの算出方法と解釈・測定特性・エビデンスが、一覧できる利便性の大きさは類書にはないものである。しかもわが国でその尺度を開発(翻訳)した当事者がその項目を執筆しているということで、著作権のことも具体的でわかりやすく記載されている。これ一冊あれば、QOL 測定のハードルはとても低くなる。

一方本書は、実践面に徹したマニュアルであり、QOL の初学者には向かない本であると誤解される方もいるかもしれないが、QOL の基礎知識、評価尺度と測定特性についての項目はコンパクトではあるものの、非常によくまとまっており、この分野への入門書としても秀逸な出来栄となっている。多くの臨床家・研究者の皆さまに手に取っていただきたい一書である。

●「臨床・研究で活用できる！ QOL 評価マニュアル」

B5・頁 352 2023 年 11 月

定価：4,950 円(本体 4,500 円+税 10%)

[ISBN978-4-260-05279-5] 医学書院刊